

「オゾン層・紫外線の年のまとめ（2018年）」の主な内容

【オゾン層の状況】

○世界のオゾン層

- ・2018年の年平均オゾン全量は、北半球では広い地域で多く、赤道付近では全域で少なかった。南半球では中緯度はほぼ全域で多かったが、高緯度では広い地域で少なかった。
→ 本文 1～4 ページ参照
- ・世界全体のオゾン全量は、1980年代に大きく減少したが、1990年代後半に減少傾向が止まった。近年はわずかな増加がみられるが、最近5年間のオゾン全量は、オゾン層破壊現象が顕著に現れる以前の1970年代と比較すると、依然として少ない状態にある。
→ 本文 18～19 ページ参照

○南極オゾンホール

- ・2018年の南極オゾンホールの面積は、南極域上空の下部成層圏気温が低く推移したことにより、最近10年間の平均値より大きく推移し、最大面積は2,460万km²（南極大陸の約1.8倍）を記録した。→ 本文 5 ページ参照
- ・2018年の南極オゾンホール発生時期（8～12月）における南極昭和基地上空のオゾン全量は、8～11月は参照値（1994～2008年の平均値）並で、12月は参照値よりも多くなった。
→ 本文 6 ページ参照

○北半球高緯度のオゾン層

- ・2018年2月の北半球高緯度における月平均オゾン全量は、北半球高緯度の広い地域で多くなり、太平洋北東部から北アメリカ大陸北部にかけて少なくなった。2月上旬以降、極渦の環状構造が崩れ、渦が弱まったため顕著なオゾン層破壊は起こらなかったと考えられる。
→ 本文 9～10 ページ参照

○日本上空のオゾン層（札幌、つくば、那覇）

- ・2018年の日本の月平均オゾン全量は、参照値（1994～2008年の平均値）に比べ、札幌では2月に多く7月に少なかった。つくばでは2月と4月に多く、8、10、12月に少なかった。那覇では3、4月に多く、12月に少なかった。
→ 本文 11 ページ参照
- ・国内のオゾン全量は、札幌とつくばにおいて、1980年代から1990年代半ばまで減少し、その後緩やかな増加傾向がみられる。那覇においては1990年代後半以降、緩やかな増加傾向がみられる。
→ 本文 27 ページ参照

【紫外線の状況】

○国内の紫外線

- ・2018年のつくばにおける紅斑紫外線量は、参照値（1994～2008年の平均値）に比べ、4～8月、10、11月に多く、特に7月は観測開始から3番目に多くなった。紫外線解析値による参照値（1997～2008年の平均値）からの偏差の全国分布では、6～8月、10、11月は広い地域で正偏差となり、1、2、9月は広い地域で負偏差となった。
→ 本文 14～16 ページ参照
- ・国内の紅斑紫外線量年積算値は、札幌とつくばでは1990年代初めの観測開始以降、有意に増加している。
→ 本文 31 ページ参照

○南極昭和基地の紫外線

- ・2018年の南極昭和基地における紅斑紫外線量は、2月に観測開始（1993年）以来その月として最小値となった。
→ 本文 17 ページ参照